二〇二四年十二月十八日（水）十六時　【勤行】「正信偈」真四句目下、念仏讃 淘五、和讃「三朝浄土の大師等」次第三首、回向

十六時三十分【法話】斎木浩一郎師（真宗大谷派三条別院列座、新潟教区 浄福寺衆徒）

於・興西寺（名古屋市西区城西四-一五-二四）　／　協力金・お一人三〇〇〇円以上

」

報恩講をおつとめする。〝恩に報いる〟ということであるが、より端的に〝恩という目に見えないものを確かめること〟といってはどうか。では、恩を確かめるといっても、それはどのような恩か。

時代劇や任侠物で見るような一宿一飯の借りを返すようなものではない。そのような恩であれば、返せば済む話であるし、どうしても打算が雑じる。義理を通す任侠映画の主人公たちに心動かされる向きもあろうが、それこそ落とし穴、どんなカッコよく生き、そして命を賭して信念を貫いたとしても、所詮は個人性を離れ得るものではない。釈尊や親鸞聖人がヒーローの如く描かれることがあるが、しかし、そういうものに用はない。

私に先立ち、迷い、苦しみ、ようやく生きた者を「よきひと」と見出したのが、誰あろう親鸞聖人ではなかったか。そのような親鸞聖人の態度に、やっとご恩という言葉が当てはまってくる。私は、いつも迷い苦しみから逃げ、ごまかし、向き合う術を知らない。自分の迷いや苦しみすら、自分で知ることが出来ない。そのことを報（しら）せる、それこそご恩といただいてみたいのである。

親鸞聖人が探り当てた、自らにまで続く、迷いの苦しみの道行き、即ち、七高僧の名に託された人類の歩みが結実した「正信偈」をいただき、ともに報恩講をおつとめしたい。

無数の人が一人歩みゆくその道は「法蔵菩薩」と象徴され、南無阿弥陀仏と名のり出される。その人の九十年を憶念し、つとめられる、伝えられ来たりし報恩講。親鸞よ、汝、我が法蔵菩薩となりたまえ。親鸞よ、我、汝が法蔵菩薩となりたまわん。

いま、親鸞によって成される報恩講をつとめよう。この現代に、親鸞の道を証しする報恩講をつとめよう。ご参集、お待ちしております。(宮田素樹)

◎お斎（近隣店舗で会費七〇〇〇円）＊お越しいただける方は十二月十日までにメール等でご連絡ください。

どなたさまもどうぞお参りください。お待ちしております。

主催・欲聞座 ■ https://yokumonza.wixsite.com/home ■ 090・9194・1795 ■ yokumonza@gmail.com